

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



漆黒の
令嬢インター
獣魔の贄

小説 空蝉

挿絵 助三郎

第一章 魔を狩る少女

第二章 因縁の魔犬

第三章 令嬢陥落

第四章 一族の子

エピローグ

006

049

110

156

250

登場人物紹介

Characters



くろゆり さき 黒百合 沙希

金髪碧眼の少女エクソシスト。かつて父を黒い魔犬に殺され、その魔犬の行方を追っている。高慢な態度を取るが、それは素直に慣れない性格のためであり、根は素直。

リズ

沙希の使い魔。単純な性格で、少し抜けたところがある。

ギリアム

沙希の父の仇。魔犬族の長で、真っ黒い体毛を持つ。

ディアック

狡猾で残忍、かつ好色な悪魔。

ギリアムの唸りに、巨大な肉幹がぶるりと呼応する。先端に糸引く露を溜めた剛直が少女の股の間でビクビクと跳ね、異変を察知して振り向いた顔を逸らそうとした美麗の容貌へと白い汚濁を勢いよくしぶかせた。

——びゆるううッ！　びぐんっ、ぶびびゆぐっ！　どぶぶぼぶぶうッ！

けたたましい射精音と共に激しく噴き出た白濁汁が、べつとりと美しい鼻梁を穢し、漆黒のゴシックススター服へと降りかかる。衣服を通して伝わる熱い飛沫、また鼻筋に感じる粘ついた不快な感触に、考えるより先に悲鳴が漏れ出ていた。

「い、いやあッ!?　ひっ……く、臭い……うつくううッ！」

弧を描きボタバタ零れた汚濁は、すぐに生地へと染み込んで強烈な臭気を放ち始める。漆黒の衣装に白い汚濁のシミが点在し、染み込んでいく。

「よ、よくもっ……私の、お父様の誇りをつ……許さないっ！」

「そういえば、あの男も黒の衣装を着込んでいたな。それは、あやつの忘れ形見か」

黒百合の誇りの象徴、漆黒の衣装が穢された——そのことに強い怒りと屈辱が渦巻く。だが、それもほんの一瞬だけのことだった。

鼻筋をダラリと垂れ落ちてきた白濁が、唇に纏わりつき口腔へと流れる。耐えられぬ苦味が口内に広がり、えずきが込み上げて下腹がビクビクと踊り狂う。

「に、苦いっ……それにベタバタして……。気持ち悪い……！　な、なによこれ……」



ま、さか……ひアンッ!？」

指先に散った粘液の粘つきに、眸をきゅっと閉じて耐えようとした。漂う臭気はこれまでに嗅いだことがない生臭さで、けれど吐き気よりも先に甘い痺れが背筋を伝っていく。

「牡の精も知らぬか。その癖、身体の方はもう悦んでおる」

（う、嘘でしょう……くふあ……! どうして、身体が熱くなってるのよおっ!）

熱い。全身のどこもかしこも熱を帯び、今すぐ全裸になりたいほど熱気を纏っていた。漆黒の衣装の内蒸れた汗が熱を溜め込んで、じつとりと肌を湿らせ滲んだ衣服を張りつかせた。先ほど浴びた大量の粘液の忌まわしい匂いを嗅げば嗅ぐほどに頭は痺れ、脈拍は加速していく。踏ん張れずへこたれた膝立ちの足はカクカクと情けなく揺れていた。

「肉も淫臭も隠しきれはせぬというのに、このような布切れを穿く人間の気が知れんな」突然何を言い出すのか。不審と未知の恐怖で見上げた。獣の爪が、めくれたスカートの内へと潜り、純白のTバックショーツ、その縦の部分へと引つ掛けられた。そのまま太い指が、尻の割れ目を覆っていた布地を強引に引き千切る。

「やつ、やあつ! やめ——いやああああッ!」

——ピリィィッ! ピリリリィィィッ!

少女の叫びに、上質な絹の裂ける音が重なり合う。剥がれた薄布は、緊張の汗で濡れる左太腿に絡まった。

「ハハッ、獣には分からねえか。隠してる方がエロく感じることもあるつてのによ」

ディアックが漏らした茶化しは少女のつんざく声にかき消され、魔犬の耳に届かない。

「イヤらしくも淫靡に開いた花弁めが。もう涎を垂らして待ちわびておる」

「い、言わないでえっ……おかしい、私の身体あ……おかしいのオッ！」

異常なほどに高揚し、高鳴る鼓動。あり得ない量の蜜を零し続ける潤みきった陰門も、とても尋常であるとは思えなかった。

（何なの……？　くう、ソウラ……。何か、肉体に外的要因が加えられている……？）

努めて冷静さを保とうと、ぼやける思考を懸命に働かせた。突然、獣の発情期の如く身体が盛り出した現状は、どう考えても何かの外的な要因が加わったとしか思えない。そして、そう考えれば自ずと答えは一つとところに集約されるのだ。

「さ、さっきの精子……あの臭くて、くう……汚らしい汁が……ッ！」

「気づいたか、聡き娘。我が精には、牝を狂わす成分が含有されている。それもこれも、我らが血族を世に残すため。そのために我はどんな種族とも交わり、子を孕ませ、より優秀な孫を生ずのだ……！」

「ギリアムの精子はくっせえからよオ。その上粘りも強いときてやがる。胎の奥で出されれば最後。べっとりヒダヒダにこびりついて、どんな女も一発で受精しちまうのさ」

遠巻きに悪魔の囃し立てる声が聞こえる。告げられた事実は今まで同様にどれもこれ

憎悪を快楽が上回る現状に、少女自身が困惑し動揺していた。堪えようのない快感信号が送られるたび、華美な衣装を乱して獣に抱えられた身体がビクビクと情けなく跳ねる。食い締めようとした歯の隙間から、媚びた甘い声音が勝手に零れた。

「ひぐウ！ また、また頭真つ白になっちゃうう……！」

強靱な顎と容易く肉を裂く牙にあえて柔らかな愛撫を受けることで、戦慄く心が次第に遠のいていく。舌の上下に合わせ、熱い獣の口腔に密着した穴から止め処もなく愛蜜を噴き上げる。いつしかままならぬ肉体を自ら陵辱者の唇に押しつけて、魔性のもたらす甘美な痺れに火照った身を任せていった。

「おうおう。大洪水じゃねえか。ヌルついてテカテカ光ってるぜ」

「今すぐに突き入れても、もう問題あるまい」

(な、に……？ 魔族ども、何を言ってるの？ また、何か企んで……)

下僕の女との交合はあっても男に抱かれたことはない。それゆえに、獣と悪魔の会話の意味をまるで理解できなかった。下着を失いスースーと肌寒い股の間に、灼熱の剛直が押し当てられるまでは――。

「ヒッ！ あ、熱いっ……硬いものがあ……！」

男の欲望にたぎる肉棒。粘るような、牡のしつこい淫臭。脈打つ剛直が秘肉をつつく感触はおぞましき以外の何物でもなかった。本能的な畏怖に、脊髓を緊張が駆け抜ける。

「い……やあッ！ や、やめてえええ……ッ！」

気づいた時には遅く、思いの限り悲鳴を上げる暇も、覚悟を決める猶予もなかった。瞬時に交錯する恐怖と嫌悪。たぎり、かすかに先端を湿らせた牡の熱が押し当てられた媚肉を通して伝わって、黒衣の下の胸を焦げつかせていく。グチュリ、と響いた水音が未通の少女が聞いた、最後の音となった。

「ゆくぞ——！」

——ずっ、ずぶぶぶぶううううッッ！

「うぎっ……あああああああ——ッ!?」

突然訪れた強烈な下腹への圧迫感。抵抗することさえできずにプチプチと脆くも破れゆく薄い皮膚の悲鳴を、確かに彼女は聞いた。だがそれによつて沙希の肉体にもたらされたのは、破瓜の激痛などではなかった。

黒百合の名を守るため。眼鏡に適う男が現れるまで大事に取っておかねばならない処女の証を引き裂かれて、これまで味わつたことのない苛烈な快感が押し寄せてきた。これもあの精液の効果か——そんなことを考える余裕すらありはしなかった。

（ど、どうしてえ…… イイッ……！ 犯されてるのに、身体が戦慄いてえっ……）

「ウオオオオ……もう奥についてしまったか、浅い壺穴だ。ぬうんッ！」

ドスン、と正常位で鋭く突き込まれた極太の肉槌が収縮する膣道を押し拡げ、子宮の入

り口にまで到達する。子を育む器官を押し潰さんばかりの挿入に、少女の背中が大きく反り返った。

「ひぐううううっ！ きゃあああああううううう——ッッ!!」

獣と生殖器で繋がったまま、甲高い嬌声と共に鋭い快媚感を味わう。カクカクと揺れる細腰の奥から押し出され溢れた淫蜜は、ギリアムの逞しい胸板から獐猛な貌まで、大量にひっかけられていく。

「グルウッ……お前の父の力を食らって以来、私の精は同族以外にも効果をもたらすようになった。それも、優れた呪力を持つ牝ほど、てき面にその本性を引き出させる……気に入ったぞ！ この乱れ様、まさに極上の呪力。我が子を孕むのに相応しい肉壺だッ！」

「ひぐっ……ぐうんッ！ こんな獣に、私の初めてがあ……ゆる、さないっ……」

本来なら、心を許した殿方に捧げるべきもの。共に破瓜の痛みを共有し、優しく抱かれて痛みの中にも愛される喜びを見出すことを夢見てもいた。なのに、その痛みすら知ることなく、快楽漬けの中で忌むべき魔族に純潔は無残にも散らされてしまったのだ。

ズルリ、と根元まで胎の中に埋まっていた獣の肉棒が一気に引き抜かれる。見せびらかすように眼前に突き出された太い筋の浮いた幹には、所々に赤い鮮血が点々と絡まり、こびりついていた。

「ひぎっ……！ ぐ、くふ……ううアアッ、ぐくううう……ッ！」

抜けゆく異物の感触に望まぬ快感を与えられつつ、支えを失った漆黒のドレスを纏いし令嬢は地に尻と背中をしたたかに打ちつけてしまう。めくれ上がったままのスカート。その股からも零れる処女の印。獣に奪われた純潔の血を目にした途端、悔しさとも寂寥ともつかぬ喪失感が少女の胸を襲った。

鮮血をシスター衣装で拭き取られ、赤いシミをつけられる屈辱。もう、自分は処女ではないのだ。目の前の牡に力づくで奪われ踏みにじられたという、信じられない現実。魔性の者に一生消えない傷を胎内に刻みつけられてしまった。

「ゆる、さない……絶対に、絶対にこの手で殺してやる……！」

「フ……いい目だ。初めて我に傷をつけたあの男と同じ、その目が……血がたぎるわ！」
復讐に燃える眸を真っ向から受け止め、隆起したままの剛棒を誇らしげに奮い立たせて獣の顎門が言葉を紡ぐ。地を揺るがす咆哮が、少女の感情と正面からぶつかっていた。

「ハッ。ギリウムもよくやるぜエ。あの牝ガキ、処女を失ったばかりだつてのに、もうだらしねえよがり顔を晒してやがる！」

離れた位置で祭壇を見つめていた悪魔が、声高に下品な感想を口にする。皮肉っぽく歪んだ唇をニヤつかせるその股間では、褐色の使い魔が懸命の口淫奉仕を続けていた。

（沙希で興奮してるんだ。あたしの口やペロよりも、沙希のエッチな顔でっ……！）

唾液と先走りの苦い露で一杯の口内。その内でディアックの陰茎がムクムクと増大したのを、幹に絡ませた舌先で敏感に感じ取っていた。必死に持てる性技を駆使して奉仕しているというのに獣に嬲られる少女を見て、より昂ぶっている。そのことに少なからず嫉妬と、強い不安を覚えた。

「んあ？ どうした、舌の動きが止まってるぜ。オイ、おっ勃たてといて世話しねえってのはどういう了見だア！」

思索に耽ったわずかの間の停止でさえ、気短な主は機嫌を損ねてしまう。

「背中 of 刻印を消してほしいんだろう？ なら、俺様のちんぽに従わねえとな」

矢継ぎ早に今度は甘い声が響き、背中を優しく撫でられた。『護符』。沙希との主従の証であり呪縛であるその紋様がなくなれば、心も身体もディアックのモノになる。魔の波動にあてられたのではなく、自ら使い魔はそれを望んだのだ。

「も、もうひわけ、ありまふえん……むぐ、ちゆるっ……ぢゅぴびィッ」

「そうだ、それでいい」

勃起肉棒を口に含んだままぐもった声で返答するリズに、見下ろす悪魔が頷く。こうして牝を跪かせ屈服した表情を見るのが、他人を暴力で押し退けての上がってきた男の何よりの愉しみだった。相手が壊れることなど、厭いはしない。いくらでも代わりはいるのだから、今は本能に任せて腰を突き込めばよいだけだ。

魔族の英雄である高位悪魔はひたすら肉欲を堪能することに集中していった。そしてはるか高位に位置する悪魔に、同質の魔を秘めた使い魔は決して抗えないのだ。

「先端は特に念入りに舐める。ソコは風呂じゃなく、女の口の中でゆすぐと決めてるんだからよッ、うおおっ……！」

「ふぐむう、ずぢゅびびびっ……あ、あたしのお口でキレイキレイしまふう……」

従順に従うリズは気づいてはいない。呪縛から逃れたつもりで、より凶悪な悪鬼に囚われてしまったのだということに――。

「ああ、いいぞ……お前のおかげであの牝ガキを魔犬に捧げることができた。魔犬を世に放ち、魔の波動を浅ましい人間どもに振り撒く俺の使命ももう終わりだ……帰ったら、妃に迎えてやるからな、リズ……ッ！」

寵愛を一心に受けられるのだと信じて。男の甘言に惑わされるがままに褐色の使い魔は舌を膨張し続ける肉の凶器へと絡ませる。

「う、うれひいれふう……ごひゅじんひゃまあ……」

不自由な言葉の代わりに舌を肉棒の先の割れ目へと突き込み、ぷっくり浮いた雫をヂュウヂュウとはしたなく吸い上げた。湧き続ける透明の苦い汁を喉を鳴らし嚙下していく。

「む、おうっ……へ、へへへ。ザーメン、ちびっちまいそうだ。いいかア、一滴残さずに……飲むんだ、ぜえええエエエ……ッッ!!」

熱心な従魔の吸いつきに、目を細めて歓喜の声を漏らす。いよいよ高まってきた快樂信号に腰骨を駆け上つてきた痺れに促され、悪魔の肉棒がビクリと震えた。

——びゆるぶッ！　ぶぐびゆびいいイイッ！　ぶびっ！　どぐどびゆぶううッ！
「んッ、ぐぶうううッ!?　ごぎゆ、ごぎゆっ……んん、んぐんおう……ッ！」

口中で勢いよく放たれた粘液は、小さな口腔内には収まりきらず鼻から逆流し、気管にも流れ込む。それでもディアックの腰にしがみつき、リズは舌の裏に溜まった汚濁を延々と飲み下し続けた。

それが、新たな主への忠誠の証。愛情表現なのだと、頑なに信じて——。

「へへ、ようやく味わって飲めよオ」

「ふあ、ふあい……おいひいれすうッ。ディアックう……」

（リ……ズ？　あの子、またあんな声を……私との夜では聞かせてくれなかった、啼き声……私よりも、あの男を選んだ、裏切り者……ッ）

恥辱にまみれ悔しさにたわむ視界の隅に、うっとりとかかとりみのある液体を飲み下す元パートナーの褐色肌が映し出されていた。

その視界が、不意に黒く染まる。

「他人の情交を見るだけではつまらんだろう」

黒い獣。黒く輝く毛並みの魔犬が、勃起も露わに沙希の虚ろな眸の前に突きつけた。漆黒の中にあつて、そこだけが赤黒く充血し隆々と反り返った肉の楔。自然と少女の眸はそこに吸いつけられた。

「こ、こんな大きなものが、私の中に……」

「そうだ。コレが、お前の純潔を奪った。お前の初めてとなった牝のペニスだ」

目と鼻の先で所々破瓜血のこびりついた肉幹がビクビクと揺れる。あまりの遅しき、圧倒的な存在感に犯されている最中だという現状も忘れ、エクソシストの吐息が荒く乱れていく。野生の牝の獣臭が、鼻孔から侵入して思考をさらに霞ませていった。

「上質な呪力の娘よ。必ず孕ませてやろう。我が子を産み育てる、母となるのだ」

宣告と同調するかのように、雄々しい牡肉がドクンと一際大きく震える。

（はは、おや……。私が獣の、母に……？）

連続で快感に満たされ、グズグズにされた頭では考えが上手くまとまらない。『母』という単語に、少女は写真でしか見たことのない自らの母親を思い浮かべ、次いで己が魔犬の子を抱く姿を想像した。どうにもぼやけて予想できない未来図。少女にとっては母とは未知の存在で、尊敬する父だけが拠り所であったのだ。

「お……とう、さま……っ。ハッ……!？」

尊敬する実父の顔を思い浮かべた瞬間、意識が一気に覚醒する。移ろいの狭間であった

とはいえ自分が夢想していた内容のおぞましさに、今更ながら嫌悪感が湧く。悪夢を振り払おうと無心に首を振り、向けた視線の先には身を寄せ睦み合う悪魔たちの姿があった。

「おらっ、竿に残ったザーメンも啜り飲めッ！」

「ふぐっ、ぐもおお……ふわぁ、いいい……」

(り、リズっ……あんな、喉の奥まで唾え込んでっ……)

傍目も気にせずに繰り広げられる悪魔たちの口淫。苦しそうに呻きながらも従順に男の肉棒を口に収める褐色の使い魔の眸が、ちらりとこちらを向いた。蕩けきった眼差し、優越にも似た見下すような視線。かつて睦み合った時に沙希が彼女に向けたであろう不遜な眸が、今は逆に少女の汚されたシスター服に注がれている。

「私の服……黒百合の、誇りを秘めた……衣装がっ……臭く汚されてえ……」

その視線を追いかけて、点々と汚濁のシミを残すドレスを見るにつけて、少女の心は引き裂かれる。より一層惨めな気持ちに湧き上がってくる。

「孕み胎に選ばれし娘、沙希よ。グルオオ！子を生そうぞ。孕ませてやろう……！」

捲れ上がったスカートの下、大股に開かされた足の間に、黒い魔犬の巨体があった。生殖の間中一度も萎えていない強欲な肉棒が天を突いて反り返り、沙希の黄金色の恥毛にまるで馴染ませるが如く擦りつけられている。脈動する先端から漏れた汁が、濡れた金糸を肉襷へと撫でつけていく。

「い、いやあああああつ、は、離せ、ケダモノオツ！ 獣の子なんて……産みたくない！……ひぎい……ッ！ いひやあああああッ！」

暴れ出そうと蹴り出したはずの脚は動かなかった。破瓜血で赤く染まった剛直の切っ先が、再度胎の中へと押し入ってくる。一度押し破られた秘裂は、何の躊躇もなく獣の生殖器を受け入れてしまった。

（は、入ってくるうっ……！ 犬の、お父様を殺したヤツの汚らしいペニスっ……！ 私の奥まで潜り込んできてるっ……！）

一気に戸惑うことなく最奥まで。催淫精液を全身で浴びた令嬢に、遠慮は必要ない。魔犬はゴシックドレスの胸元を掴み、たわわな乳肉を握り締めながら己の男根を根元まで捻じ込んでいく。

強烈な圧迫感に喘ぎ、ピクピクと小刻みに痙攣する膣内粘膜の動きが、より一層獣の性欲を駆り立てた。

「はふうあ、あッ！ だ、だめえっ、もうお腹一杯に入っつてえ……こ、これ以上はむりいいっ……あがああ……くひイイツ！」

産道を目一杯に上げられ、膣内はギリアムの肉棒でみっちり詰まっている。それでも魔犬の腰は留まらず、未だ余るその砲身の全てを牝の胎内に押し込もうとするのだ。

内粘膜の微細な肉壁を削がれ、灼熱の剛棒が脈打ちながら押し入ってくる。媚肉を拡張

されていく感覚に悶え、喘ぎ、それでも必死に挿入の中止を訴えた。注がれ続ける快樂信号に淫らに肉体は疼きを増してしまっている。自分の身体が、意思に反して作り変えられてしまう——。そのことに底知れぬ恐怖を覚えた。

「まだだ。まだ入る余地がある……グウツ、ウワオオン！」
獣の遠吠えに反射的に身をすくませた瞬間。

——ゴツ、ゴツ……ッ！

「ぎうっ!? くああ……ぐふううううン~~~~ッ!!」

膣を突き抜け子宮の入り口に到達した突端が、コリコリとした感触の扉を叩く。まるで子宮を押し退けて突き入れる隙間を捻出しようとするかのように、幾度も繰り返し硬い灼熱が叩きつけられた。

（お、お腹あ……子宮があ……。壊れるっ、薄汚い獣に壊されてしまおう……ッ！）

押さえ込まれた手足が痙攣する。戒めがなければ、祭壇を掻きむしって耐えていたかもしれぬ。汚濁が滴る髪の毛を乱し、目を瞑って懸命に悶える声を押し殺した。強烈な圧迫と、生命にも関わる損傷の恐怖。女として最も大事な器官を犯されながら、それでも甘く痺れる自らの肢体が、何よりも恐ろしかった。

「苦しいか。だが、それもじきに悦楽へと変わる。牝とは、そういうものだ……ッ！」
「やっ……くひいいいああ……ッ！」

ぶちゅんっ！ 言葉が終わるか終わらぬかの際に、獣の腰が突き込まれる。ついに長大な肉棒の全てが沙希の未開の胎内へと飲み込まれてしまった。とうとう、魔族の肉欲を全て受け入れてしまったのだ。悲嘆に沈む暇もなく、巨大な魔犬は腰を振るい始めていた。

「はひィッ、お腹、お腹苦しいのおっ！ おさ、ないでええっ！」

「口とは逆に、ココは涎を垂らして啼いておる……いい具合だッ」

先刻の絶頂で噴いた多量の蜜が潤滑油となり、獣の規格外の男根を受け入れる手助けとなった。鋭く突き込まれ悦楽の波に掻き乱される中、魔犬との結合部からはジュプジュプと泡立った蜜が攪拌かくはんされ、噴き出て絡んだ肉幹と共にまた押し込まれていく。その都度淫らに水音が奏でられ、耳を塞ぎなくなるほどの羞恥に苛まれた。

めくれたスカートの内側で打ちつけられる雄々しく猛々しい牡の象徴。魔性の獣に組み敷かれ犯されているということを忘れ、一瞬屈服してしまいそうになる。強烈な存在感が少女の肉を貪り、急速に成熟した大人の牝へと変貌させていく。

「どうして腰があ……ひぁ！ う、動いちゃ、動いてはダメなのに……っ！」

いつしか漆黒のドレスの内側で淫靡にくねり始めた細い腰を、ギリアムは牙を剥き出し満足気に眺めた。二段フリルが激しい律動に合わせ、ふるふると揺れる。意思に反して目覚めた牝としての生物本能が、雄々しい牡に屈しようとしている——！

「グオッ、オオオッ。ふふ、フハハハッ！ 我に力が流れ込んでくるっ、最高だ……最高

の呪力と肉壺の持ち主だアッ、黒百合……沙希ッ！」

名を呼ばれ、戒めの黒い影に縛られた腕を引き寄せられる。腕に纏わりついていた黒い影は繋がった魔犬の前足に吸収され、消え失せた。自分に倍する太い前足に腰を挟まれ、下半身は獣との愛合に悦び咽んでいる。さらに結合は深められ、剛直は一層強く密接する。亀頭で子宮を押し上げてきた。

(子宮が、押されてるっ……肉の棒で、子宮押し潰されちゃうっ！)

悪夢のような現実から逃れることも叶わず、蕩けた視界は弥が上にも黒犬との結合部へと集中した。視線を逸らそうにも、黒い巨体以外に映るものはない。

汚らわしい牡犬に力づくで組み伏せられ、人ならざる獣の生殖器を肉粘膜に押し込まれているのだと改めて自覚し、激しい屈辱が全身を襲う。父の仇であり忌まわしい魔の者だということが、なおさらにその想いを強めていた。

「見えるであろう。我と沙希が繋がる部位、牡と牝の結合が」

「言うな、言うなアッ……」

濡れている――。魔犬と繋がった肉の裂け目から、とろみのある蜜液が染み出てきていることに、本当はとつくに気づいていた。魔犬の精がもたらした悦楽の渦が、穢れなき乙女だった少女の肉を蝕み、淫靡に染め上げようとしている。

獣の荒々しい抜き差しのたびに肉棒に掻き出された蜜液は周囲に飛び散り、愛用のシス

ター衣装を、神の奉られた祭壇の上を淫らに汚していった。

「もうじきだ……もうじき、子袋の壁目掛けて我の子種がしぶく……ッ！」

巨大な顎門が開き、低い声音での非情の通告。叩きつけられる腰が加速し、金糸の茂みに覆われた秘肉が硬い獣毛との摩擦で赤く腫れあがる。苛烈な突き込みに子宮は痺れ、歯止めが利かない肉鬣は止め処なく蜜を吐き出し続けた。

「ひきやああ！ 出すなあ！ 獣の臭い汁なんて嫌よッ、奥で出さないでえええッ！」

逃げようともがく腕に、獣の爪先が絹を裂いて浅く食い込む。軽い痛みと同時に、破れた黒衣から覗くきめ細かな美肌から、うっすら朱色の筋が数本流れた。覆せぬほどの強大な暴力に、力づくで蹂躪されているのだと今更ながらに見せつけられる。

ゴシックドレスを乱し、お気に入りの服が汚れるのも厭わず、なりふり構わずに抗わなければならぬ。そうせねば、魔物の体液を胎の奥底で吐き出されてしまうのだ。それなのに、危機感が募る頭の中とは逆に、身体は牡の祝福を待ちわびるが如く随喜の涎を噴き続けている。相反する反応に、少女は狂わんばかりの絶叫を上げた。

「射精……射精しないでえええッ！ はぎイッ、いひいッ！ グリグリ硬いのお、奥で当たってええ……ッ！」

腔内射精の恐怖と本能的な生理反応で、剛直を食い締める肉鬣がこれまで以上にきつく収縮する。

「イク……ぞ！ しつかりと奥底で受け止めるが、いい……ヌッオオオオオオッ!!」
頑なな心だけが懸命に拒絶する中、甘美な感覚に惑わされ踊るドレスの腰を魔犬の二本の足が挟んだ。がっしりと強く、押しつけるように突き出された獣欲の剛棒が収縮する淫穴を抉り、絡みつく柔褻を引き剥がしながら奥へと到達する。強まる締めつけに抗うことなく、黒い体毛に覆われた獣の腰が大きく跳ね上がる。

——どぶるううううううッ！

「ひうっ！ うあ、あああああ……！」

第一撃が子宮口を叩いたのを鋭敏にも感じ取った瞬間、沙希の腰もまた跳ね上がりギリアムの腰骨へと接着した。とっさに獣の野太い脚を掴んで、震える腕のフリルのあしらわれた袖が衝撃に揺れる。そのせいで、心ならずともより深い子宮の間近で白濁の飛沫を受け止めることとなってしまふ。

——どぐんッッ！ びゅぶぼっ！ びゅばばあ！ どぐッ、ぶぶぶぶぶうううッ！

「出てるうっ、腰が痺れえ……うくああ、あひッ、イ……クううううううッ！」

競り上がる悦楽に従い、黒い魔犬が濃厚な白濁液をぶちまける。熱い飛沫を胎の奥深くで受け止めて、沙希の全身を甘美な痺れが奔り抜けた。呪力を奪われ、純潔を踏みじられ——ついに胎内の奥深くまでを魔族の獣欲に染められてしまった。

昨夜まで何者にも染められていなかった乙女の柔褻。早熟ながら娘らしさも残した複雑



な形状の襲の一枚一枚に、獣の精が染み込んでいく。その絶望に身を灼かれながら、再度の絶頂に押し上げられた。

「心地いい、我が肉を包む柔襲ッ！ 稀有な肉壺の締まり……至高の味わいの呪力だッ！ 気に入った、気に入ったぞッ娘！」

——びゅぐぷっ……ぶりゅう……。

男根に留まった残り汁さえも注ぎ込もうと、ギリアムが牙を剥いて腰を振る。突き込まれるたびに異常な量の精液が新たに少女の膣を叩き、べったりと襲の隙間へと染みついていった。その都度沙希の腰も反射的に震え、意図せぬ収縮を魔物の男根に加えてしまう。

（ああ……中に、汚い汁が溢れてえっ……。中でドクドク、ペニス震えてえっ……！）

打ちひしがれる沙希の眸に、忌まわしい魔犬の貌が映る。憎んでも憎みきれない眼差しは猛々しくギラつき、まだまだ陵辱が終わりを告げぬことを鮮明に物語っていた。

「まだ出るぞっ……ぬう……フンッ！」

——ズン……ッッッ！

「くあ……は……ああ……ぐ、ほおお……ッ」

とどめとばかり押し込まれた鋭い一撃。エクスタシーの余韻に浸る頭の中でバチバチと火花が散る。子宮口を叩いていた射精中の肉棒がより奥に到達したのだと気づくのに、さほど時間は要さなかった。

(だめよお！ それ以上奥は……ソコはダメなおおおっ！)

「子種を直接流し込んでやろう……！」

掴まれた腕がブルブルと震える。名うてのエクソシストとしてではなく、一人の女としての本能が告げていた。荒ぶる獣は神聖なる子を育む器官にまで剛直を押し込み穢そうとしている――。

「孕ませてやる。我とお前の呪力を合わせ……優れた子を生すがいい……グウウッ！」

——びゅぶるっ！　びゅぶぶぶぶぶ！

三度目の吐精が、こじ開けられた子宮の壁を打ち叩いた。無防備な牝器官を、あつという間に白い濁液がなみなみと満たしていく。

「ひあ、ああ——ッ……」

達した直後の生殖器に直接激しい汚濁の飛沫をひっかけられ、糸引くほどに濃密な粘性汁が胎内の壁へとベトベトと張りついて垂れる。女として最も大事な器官を精液で染められ、穢された悲嘆に声ならぬ声を壇上で響かせながら。漆黒の令嬢シスターは打ち震える媚肉で、ひつきりなしに注がれる牝の精液を受け止め続けた。

「ひいひい……ッああ！ やはあつ、私の服つ、黒百合の衣装を……汚すなあッ！」

背後からの暴虐者もまた、後ろ足で立ち前足を少女の黒衣の肩口に置いてチンチンの体勢を取る。二匹のチンチンポーズに挟まれた格好で、沙希の小鼻がヒクヒクと動いた。薄い衣装の生地越しに感じる剛直の硬さ、火傷しそうな熱さ、そして人では味わえぬ濃厚な牡の体臭に意識が一気に持っていかれそうになる。

（おっばいと、せ、背中でっ！ あっついおちんちんがビクビクしてるのおおっ……！）

背中では衣装越しに脈打つ肉の裏側が火傷しそうな熱をもって押しつけられ、胸の谷間では半透明の汚濁を吐き散らかす肉の突端が異臭と共に鼻先をかすめた。

匂いを嗅いでは、灼熱に感じ入ってはダメだ。心のどこかでそう忠告する小さな声が聞こえる。それでも、沙希の美しく曲線を描く鼻梁は鼻先に玉の汗を浮かせ、薬物の中毒患者のように視点のぼやけた眸で、獣の体臭、精臭を貪欲に嗅ぎ取っては吸い込み続けた。

（はわあ……この匂いが、この匂いが私をダメにするのお……エッチでくっさあい犬の匂い、どうしても、抗いきれない……）

黒いゴシックドレスと純白のフリルで覆われた腰をくねらせ、身悶える。食い縛ろうとした歯はカチカチと震えて噛み合わなかった。どこか艶美な雰囲気漂浮させる漆黒の令嬢シスターの妖貌に、祭壇へと押し寄せた数多の獣たち全員がギョロギョロと大きな目を見開いて見入っている。

「コイツ、俺たちの匂いで感じてるのか？」

隷属の乳肉を犯す魔犬が疑問を口にすれば、

「ああ、そうダ！ この邪魔な布切れ越しにでもあつつくなってるのが分かる、ゼエ！」
黒衣にカウパーをなすりつけ、背中からうなじへと肉棒をシフトさせた獣が上擦った声を余計荒げさせる。真っ先に獲物の味を堪能する二匹の言葉に、周囲で傍観していた十以上の魔犬どもが同時に唸りを上げた。

「ひゃあ……臭い匂い、もう近づけないでえ……ッ」

征服欲を煽る虚弱な呻きが零れた直後、二の足を踏んでいた魔物たちは一斉に祭壇へと詰め寄った。足の速い者が我先に祭壇上へと登り、スペースがなくなると間に合わなかった者どもは少しでも生贄に近づこうと祭壇の周囲をぐるりと取り囲む。黒衣の令嬢シスターは、みっちり詰まった獣肉の檻に閉じ込められてしまうこととなる。

（ひはあ……！ また、匂いが濃くう、あついおちんちんがいっぱいイイッ！）

乳肌の奥で心臓がキュンと高鳴り、全身が熱く高揚しているのを感じる。かつてないほどの執拗さで心にネットリ絡みつく情欲。もう、他のことなど考える隙間はなくなっていた。ただ、ただ目の前にある快楽の源にしがみつきたい。

「おおオレのモ握れッ！」

「オレも、このちっちゃ手デ……！」

「きれエな布オ、汚してやるう！」

「プニプニのほつぺたア……ッ！」

だらりと下がった細腕の、絹の手袋で包まれた掌に、揉みくちやにされるドレスの裾や袖口、果ては涙と涎で濡れ汚れた頬にまでたぎる獣肉棒が密着する。そのどれもが凶悪に捻じくれた砲身をヒクつかせ、長年の垢をこびりつかせて黒ずんだ尖端から悪臭を——獣魔に隷属する少女にとつてのご褒美を強烈に匂わせていた。

「うはぁん……臭い……！ 臭いはずなのに、なのにイイツ……！」

ヘッドドレスを揺らし、金髪がむせ返る熱気のもたらす生温かい風に舞う。イヤイヤをするように左右に振られた高潔な美貌は情欲に潤み、屈辱とも歓喜ともつかぬ涙を流していた。熱と匂いに負けチロリと顔を出した舌先が、ゆつくりと乳谷で弾む肉の先に近づけられる。乱れる鼻息が、目と鼻の先の尿道口に吹きかかって、浮かんだ露を揺らした。

「ゲッ、ゲオ！ は、早く啜えろオッ！」

「うぐつ!? ごううむううンンン……んんおああ……ッ！」

期せずして焦らし効果をもたらした微妙な快楽に痺れをきらし、獣の爪先が頭を掴んで引き下ろす。ヌルつく突端に卑猥な水音と共に接着した唇と舌先から伝わってくる、忌避しながらも待ちわびた臭気と、苦味のある奇異な味わい。若々しく張りのある上下の唇に押し込まれてきた剛直の雄々しさに、目も眩むほどの強烈な快感が足先まで奔り抜けた。

（お乳の谷間で、ピクピクしててるう……。また、あの濃くて白いお汁……。無理矢理に飲まされちゃう……。お腹膨らまされるううッ！）

黒百合家の象徴である漆黒の衣装が幾多の牡の吐き出した透明の汁で穢されていく。衣服越しにでも分かる猛々しい牡のたぎりが、ただ一人の少女の肢体にありつこうと、またはありつけなかった悔しさをぶつけるように黒衣を抜き、シワくちやに掴み、汚濁を塗り込めていった。半透明の濁液が塗り込められるたび黒々としたシミが点々と広がり、いつまでも鼻に残る濃密な獣臭が染みつけられる。

まるで、それらが肌を直接穢されているようにも感じられて、被虐に満ちた精神が異様な法悦を胸の内から次々と引き出した。

「ハッ、ハッ……。汗が浮いて、滑るッ……。グルオオッ！」

衣装の襟元からうなじへと擦りつけられる肉棒が、吹き出た汗を潤滑油に加え激しく美肌を磨る。艶やかだった金髪にも多量の粘液が絡みつき、一部はドロドロに汚濁を滴らせて男根に巻きついていった。硬い牡肉に高速で扱かれたうなじは摩擦で赤く腫れあがり、上気して朱に染まったせいで余計に真っ赤に見える。

興奮する魔犬の先走りと涎が、シスター衣装の背中にボタボタ零れ落ちた。次第に密着してきた獣の体温が背中から伝わる。小さな背中に押し掛かる獣の重みが、魔物に犯されているのだという実感をより顕著に認識させた。

「オオオオン！ 乳もッ……汗とオレの汁で、ヌルヌルが絡みついてくるウッ！」

「はひやああつ！ おっぱい、ダメッ、感じすぎるからアッ……あくうううッ！」

谷間を粘液で一杯に満たしながら、魔獣が顎門の紋様を握り搾る。嘔き出すものがない乳腺がパクパクと口を開く中、強欲な肉棒はなおもさらなる快楽を貪ろうとしきりに少女の唇を打ち叩いた。ぶつけられるたびに舌先がすくい取る苦味のある汁が少女の意識を、より一層淫婦たらしめていく。

「スベスベのオッ、てのひラアッ！」

「んぶ……あ、熱いっ……両手とも、汚らしいペニスが脈打つてえ……ッッ！」

口を突いて出た淫蕩な台詞に、慌てて口をつぐもうとしたが無駄だった。唇を押さえ込めば、他の部分が快楽により一層順応してしまう。夢中で握る両掌の、肉幹の筋が浮いた部分を爪先でつつ、と搔いてやる。それだけの刺激で餓えた獣たちは多量の先走り汁を吐き零し、沙希自身に大きな快感をフィードバックしてくれるのだ。

（ああ、ダメ、これ以上は本当にイ……イヤらしいの抑えられない……こんなはしたない姿を見られてるのに……我慢できなくなるうう……ッ！）

二段フリルを押し上げる下腹部の膨らみが熱く、切なく、重苦しい。腹の中の胎児が同族の魔力がこもった精を欲して、暴れているのか。だとしたら、自分が今していることは子供のためではないか。虚ろに混乱した思索を続ける脳裏で、不意にそんなとてつもない

考えが思い浮かんだ。慌てて打ち消した夢想は、弱い己自身への擁護にほかならない。

「きゃひいイイッ！ くは……黒百合の名を継ぐ私が、獣に穢されて……気持ちよくなったりしちゃ、いけないイイイ……ッ！」

憎き父の仇への恨み、代々続く悪魔祓いの家系としての誇り。一人の人間としての尊厳と、獣の子を孕むというタブーへの忌避感。全てが被虐の淫悦となって先の心を責め立てていった。悲鳴を上げる心が、身体が牡への従属という本能に支配されようとしている。

「ついに心まで我に従属するか、沙希よ」

（そんなことない、お父様を殺したヤツなんかにつ……墮とされたりしない……ッ！）

鳴り響いた重低音に、はだけた漆黒の衣装がビリビリと揺れた。ギリアムの黒い体毛に覆われた巨体が、横に裂けた巨大な虹彩が真っ直ぐに漆黒のゴシックドレスを捉えている。獣の長の視線からどうしても目を逸らすことができずに、沙希は反発しつつもわけも分からず湧いてくる哀しみに睫毛を震わせた。

「ハアッ、ハッ。ハッハッ……グルウウウッ！」

「うはあつ、はああ……私の身体……臭くされて、獣の匂いでいっぱいイイイッ！」

舌を出した魔犬たちの荒い息に混じって、獣じみた呻きと啼き声を戦慄かせる。まさに身も心も獣魔に汚染された令嬢シスターは、繕ってきた外面を脱ぎ捨てきることもできぬまま、訪れた愉悅にただ浸されていた。

「ググウ！ 吸いつくウ……の、飲メエツ！ しつかり喉で受け取るン……ダアアツ！」

—— ぶばびゅっ！ びゅっばばばあつ！ どぶるぼびゅびゅ—— ツ！

柔らかな乳肉の間で肉棒が震え、きゅつと引き締まった玉袋が下乳に密接する。根元までを押しつけられ乳谷から唇をくぐった尖端が、白い欲望の塊を吐き出した。

「ぐうん、じゅばばおおっ！ んくっ、んくくっ……ずぢゅっ！ ぢゅづるるるッ！」

「ウオ！ ハアツ、ハアウウ……ッ！」

多量の汚濁が舌先で踊り、瞬く間に口中を生臭い匂いと苦味で満たしていく。夢中で括れに吸いついた舌に魔犬が腰を砕けさせる中、溢れた淫液をゴクゴクと喉に流し込む。

—— ぬぼんっ！ びゅっ、びゅびゅぶうううッ！ びぢやびぢやアアツ！

「ふうあああッ！ はひっ、んぶああっ……ごぼっ、ぐぶぶぶぶううんッ！」

窄まった唇が緩んだ隙に抜け出た亀頭が、さらに多量の白濁を色白の顔面へとしぶかせた。感極まった唇は大きく開き、口内粘膜でできるだけ多くの粘液を受け取ろうとする。舌を叩く欲望の熱に、再び令嬢シスターの心は隷属の暗い悦びに満たされていた。

(やはあ……臭いの、飲んでるっ、私、自分から粘っこいの飲んでええっえツツ!!)

支えをなくして軌道の定まらぬ獣の肉棒が嘔く、熱く濃密な粘り気の絡みつく白濁に、少女は金髪を汚しヘッドドレスをギトギトにされる。全身を覆う甘く切ない痺れを甘受しながら、漆黒のエクソシストは汚濁を頭から被り続けた。

「グオッ、オオオッ！ 出ルウウウウウッ！」

——ずるんッ！ びゅっ！ びゅぐぐぶぶウッ！ どぶんっ、どぼぼぶ……ッ！
「くひいやああ……ッ！ あつつう……いイイ！ ふ、ああはあッ……！」

襟首に押しつけられた剛直が、うなじから衣装の背中にかけて灼ける粘液をぶちまける。下から上へ、上から下へと射出を続ける肉勃起の先で擦り込まれれば、濁液が黒衣に消えそうもない白のシミを幾つも作った濡れ滴る生地から背筋へと染み込んでくる汚濁の塊。うなじから垂れ落ちてきた粘性汁が背中を伝い尻まで到達すると、自然と腰がモジモジとくねってしまう。

「グフウ、さ、最高ダ……ッ！」

背中から被さった獣は、最後にほつれた金髪の毛束で精液まみれの肉棒を拭いた。

（私の髪、汚されちゃった……服も汚い獣の汁で、べっとべとにされてえッ……）

「ウウ、ウウオオオオオオンッ！」

「クヒッ！ あつたかい掌でエッ……ッッ！」

——ぶぼびゅっ！ ごびゅごばばばあッ！ びぢゅっ、びぢゅりゅりゅりゅッ！

悲嘆にくれる少女の両手で、同時に二本の男根が限界を迎える。絹手袋をビチャビチャと叩く激しく熱い奔流の勢いに、恍惚に染まる少女の鼻がヒクリと動いた。汚濁で粘る掌を握り込めば脈打つ肉棒の吐精の様までがつぶさに感じ取れる。

牡の興奮に釣られるように、口中に溜まる精液混じりの唾液を喉を鳴らし飲み込む。昂ぶった身体が、熱い。苛烈な刺激を受けて焦点のぶれる視界で、女エクソシストは牡肉が手袋で拭き取られるのを恍惚の眸で見つめた。

「んふああ……ッ！ しゅごひいっ……臭いのがあつ、いつばああいいッ！」

——びゅばつ、ぶるううッ！ びゅぼるっ！ びしゃあ！ びぢびぢびぢやああッ！ 四方から、白濁のシャワーが降りかかる。避ける術もなく汚液の全てを母から授かった金髪に絡ませ、黒百合の象徴たる黒衣にベタベタと白黒斑模様を刻まれる。

漂う臭気は濃く、頭を痺れさせる。視界を遮られるほどに汚濁を振り掛けられ、垂れた粘液の苦い味わいが口中を満たしていった。粘りつく牡の感触が心を、肉体を蝕む。脚の痙攣が止められない。迫り上がる快楽の波を、押し留めることはできなかった。

「グオッ、これで最後だッ、残り一滴までひっかけてやる。我らが一族の希望よオッ！」

——びぢやアッ！ びぢゆぶうっ！ どびゆどびゆどびゆぐうううううッ！

獣の子を孕み今まさに膨張を続ける胎に、黒衣越しにたつぷりと獣液をぶちまけられる。胎の子たちが同族の精に喜びの声を上げ、一斉に下腹の壁を打ち叩く。まぎれもない魔性の波動を秘めた我が子の肉悦の息吹に、沙希は再度の絶頂へと押し上げられた。

「ンあああああッ！ ックうう！ ひぐあッ、はやひいイイインンッ！！」

——ぶっしいいいいいいいッ！ じよぼぼぼぼオオオオ……ッ！



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>